

○ 演武に先立ち、形の解説を行います。

「二天一流 五方の形」は、流祖・新免武蔵守藤原の玄信しんめんむさしのかみふじわらのげんしん（通称・宮本武蔵）によって、今から約370年前に作られたものです。これは、武蔵先生がその生涯において「六十余度」の勝負を決し、「勝利を得ざるという事なし」と言われる修行の末に到達した形、いわば武蔵先生の兵法が集大成された形であり、全体で五本から成ります。

一本目の名称は「喝咄切先返しかつとつきさきがえし」（中段の構え）、二本目は「義談ぎだん」（上段の構え）、三本目は「水形すいけい」（下段の構え）、四本目は「重機じゅうき」（左脇の構え）、五本目は「右直うちよく」（右脇の構え）です。

五方の形には荒々しさや激しさはなく、あたかも能の舞のような静かな動きの中に、「頭上満々・脚下満々」の気迫と「一寸の見切り・五分の見切り」の間合いが表現されています。掛け声も独特のもので、「ズー」「ターン」「ヘッタイ」の三声です。「ズー」という発声は大地から若木が天に向かって伸びて行く勢いを表し、「ターン」は断つ意（こころ）、「ヘッタイ」は絶対の意味である、と伝えられています。使用する木剣の長さは、大刀が3尺3寸5分、小刀が2尺。白櫓を用いて薄く、軽く作られています。これは、力に頼らず、「太刀の道」すなわち刃筋をよく学ばせるために工夫されたものです。

流祖・武蔵玄信先生は、晩年を熊本で過ごされ、かの地で生涯を閉じられました。武蔵先生は熊本において「兵法三十五箇条」「五輪書」「独行道」を書き残されました。そして「二天一流」という流儀の名称が初めて使われたのも、晩年の熊本においてであります。

二天一流には野田派・山東派・水尾派の三派がありますが、我々が継承しているのは「野田派」です。野田派二天一流の第十七代師範は、剣道範士八段・一川格治でした。一川格治師範以降は特定の個人ではなく、「熊本県剣道連盟」がこの流儀を継承しています。そして現在は、一川英機・一川一・北園雄一の三名が「達士」すなわち師範として、この流儀の普及に努めております。

本日の演武は、打太刀を二天一流鍛士・菊地原康、仕太刀を二天一流達士・一川英機で行います。太刀くばりは手塚啓一（鍛士）、解説は町田輝雄（鍛士）です。

○ それでは、「二天一流 五方の形」の演武をご覧ください。